

駿河湾の深海魚（8）

ソコイワシ（その2）

久保田 正・佐藤 武

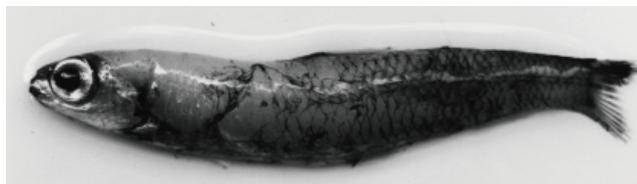


図 1. ソコイワシ
BL: 100.0mm

1985年6月5日 サクラエビ網混獲



図 2. ソコイワシと似た食性のトゲスミクイウオ
BL: 70.3 mm

1978年5月13日 サクラエビ網混獲

ソコイワシに付けられた学名の *Lipolagus ochotensis* は、ラテン語で「オホーツク海に生息する太ったウサギ」という意味です。属名の *Lipolagus* はギリシア語に由来しており、本属に含まれる魚類の独特な口と歯の形がウサギのそれと似ていることから太ったウサギと付けられました。北太平洋の亜寒帯から寒帯域に生息しています。英名は eared blacksmelt または fatty deepsea smelt といいます（図 1）。

本種の餌生物について 1981 と 1982 年の両年に春漁でサクラエビと混獲された 566 個体の胃内容物を調べたところ、共に節足動物の甲殻類プランクトンを主に捕食しており、それらは端脚類、アミ類、カイアシ類、オキアミ類、十脚類などでした。そのうちカイアシ類とオキアミ類の 2 生物群が優先し、少数の軟体動物の翼足類や魚卵も捕食されていました。また、両年を通して胃内容物の特徴的なことは、デトライタス状の物質（有機物の破片などの沈殿物）が甲殻類プランクトンなどの餌生物に混在していることです。空胃の個体は、皆無でした。また、北海道沖の太平洋やベーリング海から得た本種も同じような食性であることが報告されています。

長年多くの深海魚の胃内容物を観察していると、似たような捕食傾向を持つ深海魚が存在していることに気がつきます。本種の食性と良く似ているスズキ科魚類の一種のトゲスミクイウオ (*Bathysphyraenops simplex*) という深海魚がいます（図 2）。

この魚はサクラエビ漁でエビと共に 1970 年代には時々混獲されていましたが、最近ほとんど見られなくなりました。本種の餌生物は、カイアシ類を主体とする甲殻類プランクトンと共にデトライタス状の物質を捕食している点がソコイワシと似ています。この両種の鰓耙は、長く、良く発達し動物プランクトンを捕食することは理解できますが、これ以外に両種ともデトライタス状の物質を食べていることが注目されます。近年、ニホンウナギのレプトケパルス（葉形）幼生がこの物質を餌としていることが明らかにされました。

また、前報（本誌第 41 号, P.9）では、駿河湾中部で行なった大型プランクトンネットの曳網によりソコイワシの体長 50 mm 以下の個体が、多数採集されたことを述べました。本種以外に北方性種として知られるヤセソコイワシ（2 個体）、ナガハダカ（3 個体）、セツキハダカ（4 個体）、ミカドハダカ（3 個体）、マメハダカ（4 個体）などの小型個体の出現も確認されました。このうちヤセソコイワシはソコイワシ科魚類、ほかの 4 種はハダカイワシ科魚類に含まれます。このように年によって駿河湾内の深層域からネット採集によって北方性魚類の出現が確認されるのは、約 300 ~ 800m の中層には北太平洋北部海域を起源とする低水温で低塩分の亜寒帯中層水（親潮系水）が存在し、その勢力の強弱が海況に影響していると思われる。